

小さなバッグと小さなコスメの 小さな小さな小さな話

ハンドバッグは役に立つアクセサリ

昨今はスマートフォン(以下、スマホ)1つあれば大抵の用事は済んでしまう人が多いだろう。ゆえに近場の外出ならば、スマホだけ持って出かける場合も少なくないかもしれない。しかし、通勤や旅行時にバッグを持たない人は極めて稀であり、バッグを1つも持っていないという人は少ないと思う。

一言にバッグといっても様々な種類や機能がありファッションやシーンに合わせて形や大きさも変わる。特別なお出かけやパーティなど荷物をコンパクトに持ち歩きたい場合は、すっきりとしたデザイン性に優れたバッグが好まれる。女性にとって貴重品や財布、スマホ、化粧品など最小限の荷物を持って出かけるときに便利なのがハンドバッグである。しかもハンドバッグは、物入れの役割をしてくれるだけでなく、その装飾によりアクセサリとしての役目も兼ねている一石二鳥のバッグといえよう。

コンパクトにハンドバッグ略史をまとめました

ハンドバッグの起源は古く、コンパクトにはなかなかまとめきれないが、紀元前よりハンドバッグのような物入れは存在する。現在のハンドバッグの原型に近いものは中世ヨーロッパの副葬品より確認できる。それらはドレスに締めたガードルに、錠、毛抜き、ナイフ、櫛、鍵などの小物を吊るした鎖と小さなパースを下げるものであった。11世紀以降、帰還した十字軍兵士たちがガードルに小さなバッグを下げていたのが、腰から小物を下げるタイプのバッグが普及したきっかけといわれる。

同時代、貴族の間ではシャトレーンというポシェットに似た装飾つきの巾着袋が流行る。これを腰のベルトに吊るしていた。当時、上流階級の女性は貧者に食べ物やお金を施す習慣があったので、小さなバッグはアクセサリでありつつ、財布として、または施し物のパンや鍵などを入れた小物入れとして実用を兼ねていた。

形は徐々に変化していき、12世紀末から16世紀にかけては平たく小さくなり、ベルトに通してつけるポーチとなる。やがてナイフや短剣とともにストラップに通すようになる。ルネサンス期以降、男性の服装にはポケットがつき、ベルトにポーチを通す者は次第に減っていった。女性の服装にはポケットはついていなく、リネンなどの地味な生地で作った袋をウエストから吊るし、外から見えないように長いスカートの内側に隠した吊り下げポケットを身に着けていた。

ところが、18世紀末のフランスにて細身で体にフィットするドレスが流行する。ドレスのシルエットが崩れることを嫌い、スカートの下にポケットを吊るすことをやめ、その代わりレティキュールと呼ばれる小型のハンドバッグが使われるようになる。レティキュールは刺繍をした布などで作られ、紐またはチェーンを引っ張って口を閉じ、それを持ち手とする形状だった。レティキュールの人気は長く続き、ドレスに合わせて数点持っている女性も多かった。なぜなら、レティキュールの色はローブと揃えることがおしゃれであったからである。レティキュールの中にはハンカチーフや扇、紙幣、香水などを入れた。大多数の女性がこれを持っていたため、1825年頃には「インディペンサブル」(必要不可欠なもの)と呼ばれ



腰からシャトレーンを下げるベレンゲラ(左)
「The Miriam and Ira D. Wallach Division of Art, Prints and Photographs: Art & Architecture Collection」1190-1210年頃
ニューヨーク公共図書館蔵



フランスで使用されたレティキュール
1795-1800年頃
メトロポリタン美術館蔵

【特集】

小さなバッグと小さなコスメの
小さな小さな小さな話

【ご案内】

- 企画展
「ちいさい、ちっこい、ちっちゃ!」開催
- テーマ展示
「昭和のレトロ小さいコスメ」開催
- エデュケーション・レポート8
- 英国ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
特別展のお知らせ

ていたが、それから数年後、皮肉にも「リディキュール」(あざけり、嘲笑の意)と呼ばれるようになったようだ。

19世紀半ばまでに女性のスカートにもポケットがつくようになり、しばらくは小さな革袋をポケットに入れて持ち歩いていた。しかし1840年代初めに交通・通信網が発展すると列車での旅行が大衆化し、まもなく再びバッグを持つのが流行となる。旅行時の手荷物用バッグがハンドバッグの先駆けとして現れたからだ。

日本におけるハンドバッグの普及と認知

日本にももちろん小物を入れる袋は昔からあった。江戸時代の紙入れや明治時代の煙草入れなどちょっとした小銭や小物を入れる袋が思い浮かぶだろう。しかし、これらは主に着物の懐や袂に入れて持ち運んでおり、手に持つ仕様にはなっていない。手に提げて持つ仕様になったのは明治中期の信玄袋が最初である。明治38年(1905)に布製の手提げ袋がオペラバッグの名前で発売され、日本におけるハンドバッグの原型となる。

和装ではなかなか普及しなかったが、大正12年(1923)の関東大震災以降、洋装が普及し始めるとともに皮革製の手荷物バッグが浸透する。女性の社会進出が進むのとほぼ同時並行である。そして、大正末～昭和2年(1927)頃までにハンドバッグという言葉も定着したようである。中に入れる物は、財布、鍵、ハンカチ、化粧品などで、やはり実用的なアクセサリとして大流行していくようになる。

ハンドバッグに適応する化粧品

さて、西洋でも日本でもハンドバッグの中身には化粧品が入っていることが多いのだが、ハンドバッグは基本的に小物を入れるバッグである。ということは、想像に難くなくその中に入れる化粧品も小さいはずである。口紅を例に挙げてみても、日本でハンドバッグが普及し始めた大正末～昭和初期に輸入された口紅はどれも小型であり、それらを手本として作った日本製の口紅も一様に小さい。まさにハンドバッグに収めるにふさわしいサイズである。

では実際、ハンドバッグに口紅は入っていたのか。女性のハンドバッグの中身を見せてもらうことは当時であっても容易ではないが、昭和27年(1952)12月の雑誌『主婦と生活』の記事「ハンドバッグを拝見」に日本舞踊家藤間紫さんのハンドバッグの中身を紹介する写真が掲載されている。



ヘレナルピンスタイン口紅(左)と日本製口紅(右3本) 昭和初期 当館蔵



『主婦と生活』第7巻12号(昭和27年(1952)12月) 主婦と生活社画像提供



(拡大)

藤間紫さんは「洋服と着物と半々に着るので、両方に向くように黒革のこのような型のハンドバッグが無難」なのだそうだ。バッグの中身は、時刻表・煙草・手帳・コンパクト・万年筆ケース・口紅・眉墨などが入っている。なかなか時代を思わせる内容品だが、ここにあるポケット時刻表は縦が18cmである。このサイズを考えると時刻表の左上に写っている口紅はその約1/4くらいにみえるので、4.5～5cmくらいだろうか。今の一般的な口紅の高さは平均7cm前後なので今よりも2cmほど小ぶりであったことが分かる。

紅ミュージアムで展示している昭和20年代の実物をみると、それぞれ押し出し式の「キスミー特殊口紅」は高さ4.8cm、「オペラ口紅」は4.88cm、「ポンジー口紅」は4.65cmである。やはり昭和中期頃の口紅のサイズも高さが5cm程度のものが主流であったことが裏付けられる。ちなみに、口紅のサイズが徐々に大きくなるのは、昭和40年代(1965～)だと思われる。ファッションに大革命が起き、若者は成人してもカジュアルでポップな服装をするようになる。服装がカジュアルになるとバッグもカジュアルになり、1960年代のアメリカでトートバッグがファッションアイテムとして流行するようになった。使い勝手のよさだけが魅力だったといっても過言でないトートバッグだが、そこにファッション性も加われば日常的に使わない手はない。ビジネスやフォーマルでも使えるトートバッグの出現により、バッグに入れる化粧品もアイテム数を増やせたり、化粧ポーチごとに入れることが出来たり、バッグの容量に連係するがごとく拡張していった。

ある種の雛形?もう1つの小型化粧品

洋装化が進んだ大正末～昭和初期には、ベースメイクは色白粉が勢いを増してくる。多色化が進み、各社3色・5色・7色と色数は増えていった。この頃、粉白粉は直径5cm程度の小型粉白粉の発売が目立ち、色付き水白粉や煉白粉も「御試供品」と書かれた小型の白粉が各社から発売される。御試供品とは無料提供のサンプル品ではなく、トライアル品の意味でれっきとした商品である。もちろん価格もついている。これらはまだまだマイナーであった色白粉を普及させるため、まずはお試しサイズの小型商品を手にとってもらおうとした販売戦略と考えられる。

その少し前の大正前期においても、ヴァニシングクリームやコールドクリーム、固煉白粉、化粧水なども小型の商品がある。いずれも通常品の雛形かと思うくらい、精巧なミニチュア化粧瓶である。「御試用」という用語のほかに「豆瓶」や「普級瓶」、「宣伝瓶」と、メーカーごと呼び名は違ったが、それぞれ商品として製造したものである。昭和時代になってもこれらは販売され続け、化粧品を大衆化させるまでには相当な時間と企業努力が必要であったことが分かる。現在も3回～5回ほど試せるトライアル品あるいはトラベル品があるが、この販売戦略が100年以上も前から採用されている手法だと思うと感慨深いものがある。



オリヂナルクリーム(バニシング)普級版 昭和初期 当館蔵

企画展

ちいさい、ちっこい、ちっちゃ!

2022年10月18日(火) - 12月11日(日)開催 ※会期中は日曜も開館 観覧料600円/限定小冊子付800円

この秋、紅ミュージアムでは、5年振りとなる企画展を開催します。今展の主演は、“実物より小さく作られたモノ”です。

日本では、モノや世界観を縮小化することに親しんできた歴史が長く、すでに縄文時代にはミニチュア祭祀具の存在が認められます。

ミニチュアには、一定の縮尺で再現したものと、縮尺に統一性はなくとも再現する対象の特徴を巧みに抽出し、造形のバランスに注力したものとがあります。前者は建築模型や雛形、ドールハウスなどであり、後者はままごとと道具や人形、節句飾りの雛道具、箱庭などが挙げられます。また、縮小化の背景には、子どもの手遊びとして求められた実用性や、大人の鑑賞のまなざしに呼応してより小さなことに傾倒して



いった嗜好性などがみられます。

例えば、ままごと遊びに用いられた調理器具や

食器、茶器類は、子どもが遊びながら学ぶツール、家庭教育の教材としての意味を持つ玩具です。これらは、「小さい」といって手に持って遊ぶことのできるサイズを維持したものです。一方、大人が求めたミニチュアは、遊ぶことを目的とせず、一寸に満たないような規模の中で細部の造作や動きの再現性などにこだわり、見ること・愛でることに重きを置いた、いわば工芸玩具といえるものです。そのこだわりは、何気ない日用品の縮小化にも反映されるものでした。

本展では、江戸時代から昭和時代にかけて製作されたままごとと道具やミニチュア台所道具類を中心に、子どもと大人、それぞれの用途と嗜好を探ります。ミニチュアは使用者・所有者、時に製作者の姿を雄弁に語ります。同時にまた、それを手にした者たちがかつて見た景色や時代を今日に伝える資料でもあります。小さなものが映し出す、時代と興味をご覧ください。



大深町遺跡(梅田墓)出土のミニチュア炊事道具 江戸時代末期~明治時代 (一財)大阪市文化財協会蔵



陶器製ミニチュア食器類 明治時代 川内コレクション

【協力】(一財)大阪市文化財協会、大阪歴史博物館、川内コレクション、東京大学埋蔵文化財調査室、日本玩具博物館、吉徳資料室
【後援】(一社)日本人形玩具学会

併催企画

記念講演会「日本ミニチュア略史」

2022年11月12日(土) 14:00~15:00

講師：林直輝氏なほてる [日本人形文化研究所 所長]
定員：会場12名、オンライン80名 (Zoom 配信)
参加費：500円 (企画展観覧には別途観覧料が必要)
※申込方法等の詳細は当館webサイトをご覧ください。

テーマ展示「昭和のレトロ小さいコスメ」

2022年9月27日(火)~2023年1月28日(土) 協力: アダチヨシオコレクション

大正末期に洋装化と女性の社会進出が進むと、ハンドバッグも実用的なアクセサリとして大流行します。ハンドバッグの中には、財布やハンカチとともに口紅などの化粧品も入っていました。小さなハンドバッグに入れる化粧品ですから大きさも当然小さいものです。

また、ハンドバッグでは持ち運ばないようなクリームや白粉なども、通常品をそのまま小型化したものがあります。これらは何のために作られたのでしょうか。今展は昭和初期の小さかわいいコスメを紹介し、コスメが小さかった謎に迫ります。併せて当時のハイカラなハンドバッグを展観します。



昭和初期の伊勢半製口紅・煉紅・頬紅 当館蔵

学ぶ・楽しむ

紅ミュージアムのいろいろ

今夏も小学生の親子を対象とした「夏休みこども自由研究」を実施しました。今年は3年ぶりに対面での講座も開催。遠方に住む子どもたちや、会場では受け入れきれない多くの子どもたちに参加してもらえるオンラインも魅力的ですが、ダイレクトにその反応が伝わってくる対面講座の実施はやはり嬉しいものです。

2022年の新規講座として「**紅いろマジック～カラフルサイエンス～**」(講師:わくわくキッズ代表 阿部麻里氏)を開催しました。紅ミュージアムは、2019年秋のリニューアルオープン以来、コミュニケーションルームのナレッジラボなどを通して科学的アプローチでも紅を紹介してきましたが、科学を切り口とした講座の開催は初めてです。

今回のテーマは**光と色**。まず、光のスペクトルを見ることができる分光シートを使い、モノが見える仕組みで



ある**光の吸収と反射**を体験しました。白色の照明を見た時に現れる虹色のスペクトルや、赤や青など特定の色の光を見た時の見え方の違いなどに、皆さん歓声を上げていました。

続いて、もうひとつの主役である**紅花**が登場しました。乾燥した紅花の花弁「乱花」と、発酵させ煎餅状に成形加工した「紅餅」の2種類が配られ、まずは虫眼鏡を使ってじっくり観察。その後、それぞれを水に浸して、水の色の変化を観察しました。

※本講座は、(一財)全国科学博物館振興財団「科学系博物館の活性化への助成事業」の助成を受け実施しました。



ここで、また**光と色**に注目します。色が切り替えられる照明が登場。光の三原色である赤・青・緑の光が重なると白色になります。では、そこに人が立つとどのように見えるでしょうか。子どもたち自身が光の中に入り、実際に体験しました！

本来、紅花から赤色素「紅」を抽出するにはいくつもの工程が必要ですが、講座では照明という裏技を使って赤色を作り出しました。紅花から抽出した赤色素、そして黄色色素の液を使って書いた文字に赤色の照明を当てると…これぞ**紅いろマジック!**文字が消えてしまいました。



では、赤色の照明を当てると消えるのは何色なのか、参加者それぞれが色鉛筆を使って実験してみます。その実験を参考にアート作り。紅花から抽出した赤色・黄色の液を塗った画用紙、カラフルな付箋やシールなどを使い、各自オリジナリティ溢れる作品を作りました。最後は、赤だけでなく青や緑の照明の中、参加者全員の作品が登場する光と音楽のショー! 色が変わるとに見え方が変化する作品に、皆さん大喜びでした。



普段何気なくしている「見る」という行為。今回の講座では、その背景にある**光と色**をテーマとしました。「科学」と聞くと少し難しそうに感じるかもしれませんが、低学年の子どもたちも含め、いくつもの実験・体験を通して楽しく学べたことと思います。

英国ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館特別展のお知らせ

現代美術家の館鼻則孝氏が伊勢半本店の紅を用いて制作した玉虫色に輝く「ヒールレスシューズ」と、伊勢半本店の「小町紅」が、本年春にヴィクトリア・アンド・アルバート博物館(Victoria and Albert Museum、以下、V&A)に、後世に残すべき資料として収蔵されました。

V&Aは、1852年に産業博物館としてイギリス・ロンドンで開館。日本の美術・工芸に関して4万点超の資料を収蔵し、造詣が深いことで知られています。

現在、常設展示室の日本エリアにおいて新収蔵品を披露する特別展が開催されています。「日本のファッション文化と紅」をテーマに、当社寄贈の「小町紅」、紅餅、乱花が、V&A所蔵の紅染めの染織品や化粧風景を描いた浮世絵版画、そして館鼻氏の作品とともに、魅惑的な紅の文化を伝える資料として、2024年3月31日まで期間限定で公開されます。



© Victoria and Albert Museum, London

本作品は、館鼻氏が、東京都の伝統産業事業者の技と現代アートを融合させて、新たな価値を伝えるプロジェクト「江戸東京リシンク展」(東京都主催、2021年オンライン開催)で、当社とのコラボレーション作品として制作・初公開されました。

展覧会名: 特別展「Beguiling Beni: Safflower Red in Japanese Fashion」
(魅惑的な紅:日本のファッションに見られる紅の世界)

会期: 2022年6月2日(木)~2024年3月31日(日) ※年中無休
開場時間: 10:00~17:45(金曜日は、22:00まで)
料金: 入場無料
会場: Victoria and Albert Museum Room 45



紅ミュージアム
BENI MUSEUM

Presented by
KISSME

開館時間/10:00-18:00(最終入館は17:30まで) ※短縮開館等の変動あり

休館日/毎週日・月曜日・創業記念日(7月7日)・年末年始

入館料/無料 ※ただし、企画展観覧は有料

アクセス/地下鉄 東京メトロ銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道」駅下車 B1出口(階段)より徒歩12分/
B3出口(エスカレーター・エレベーターあり)より徒歩13分

バス 渋谷駅東口バスターミナル 51番乗り場 都01新橋駅前「南青山七丁目」停留所下車

〒107-0062 東京都港区南青山6-6-20 K's南青山ビル1F TEL.03-5467-3735

最新の情報は当館webサイトでご確認ください。 <https://www.isehanhonten.co.jp>

